

「道普請」とは何か、 今なぜ「北のみち普請」が必要か。

道は、古くから人々の往来、生活と暮らしを支えまた地域のコミュニティの場、文化を生み出す場として重要な役割を担ってきました。

かつて本州では、自分たちの道は、自分たちの手で守るのが、当然のこととして、道路の清掃、草刈り、補修など、地域に住む人々で行われ「道普請」として定着し、まさに地域が道を守り育てる時代があったのです。

しかし急速な車社会の進展に伴い、いつかしら道は、車の通るものと化し、維持、除雪、管理などは、住民から離れ行政が行うものとなってしまいました。

このように「道普請」とは、「道（みち）」を多くの人々の手により、つくり、そして守る自主的ボランティア活動のことをいいます。

高齢化社会におけるコミュニティの再生。 みちの文化の再生。 行政と地域住民の連携・協働。

この活動は、北海道で暮らす私達の生活を支えている「みち」について、花を植えたり、清掃や、除雪などのボランティア活動を通して、生活の場としてみちを再生すること、もう一つは、道をつくる、維持する、利用する、管理するなどに参加しながら、市民と地域のコミュニティを再生する、みちの文化を再生することをねらいとしています。

特に、今、高齢化社会を向かえてお年寄りも、若い人も、子供達も一緒になって失われつつある地域のコミュニティを復活させ、安全で安心な町づくり、そしてきれいな沿道環境をつくることが求められています。

国土交通省は、平成12年に、この「みち普請」活動やボランティアサポートプログラムの推進をかね、行政と地域住民の連携・協働により、道路の緑化や清掃美化活動への支援を提唱し、全国的な運動として展開してきました。

北海道開発局においても、平成13年に全国に先がけて「北のみち普請」を育てる会（会長 小林英嗣 北大大学院教授）を発足し、北海道、札幌市と一緒に事務局を北海道道路管理技術センターに置き北海道各地の「みち普請」の普及に努めてきました。

北海道の観光産業を支える、 新しい社会システムの構築。

道路管理費の節減から行政だけで行うのではなく、地域の人達が、自分たちでできることは、自分たちで行うという積極的なボランティア活動が各地で芽生えており、企業も含めて地域住民の社会貢献意識の高揚と、北海道の経済を支える観光の振興などにも「みち普請」の役割は大変重要になっています。

今、日本は、国家の財政再建など「構造改革」が色々な形で進められていますが、「みち普請」は、まさに地域を自分たちの手で発展させる実践活動の一つなのです。

北のみち普請5周年記念宣言

- 1つ 美しい北のみちを育てるためひとり一人の行動を更に発展させよう。
- 2つ みちを通じ、人と人、心と心がふれあう温かいコミュニティをつくりあげよう。
- 3つ 地域住民と行政がよりよいパートナーシップを築き共に歩もう。
- 4つ よりよいみちづくり、ひとづくりの輪を次世代に伝えよう。
- 5つ みち普請の精神を広く地域に発信しよう。

2006年2月3日
北のみち普請を育てる会

地域コミュニティを復活する

— 美しいいくつもの北海道をつくるために —

北のみち普請を育てる会会長
北海道大学大学院工学研究科教授

小林 英嗣



地域と深く関わって、みち普請活動の支援を続ける「北のみち普請を育てる会」会長の小林教授に、6年目に入った活動のこれまでと、これからのことをお聞きしました。

みち普請活動が地域再生の鍵に

●「北のみち普請を育てる会」に専門家として携わっていらっしゃるの、これからの21世紀を考えたときに、どんな問題が背景としてあるからなのか。

みち普請活動にいろいろな形で参画する、いっしょにやることの意義を、このように考えています。最近特に地方分権化が進んでいますが、行政の力が少し弱まって、市民や家族の力も弱まり、共同体も薄れていくと、みんなの役に立つことや、地域共同体の約束事に溝ができてきて、地域全体でやらなければいけない共同のことを誰がやるのか、という話になります。その溝を埋めるのがNPOであったり、地域のコミュニティ活動であったりしますが、そのような取り組みは家庭でも、学校でも、地域のご近所さんからも習わない。しかし、日本人はそういうことをしてこなかったかと言うと、実はしてきたわけです。例えば江戸時代は地方分権で、公的な場所をお互い助け合って管理し、子どもをきちんと育てて、安心して死んでいけるような安全で心地よい町を自分たちの手でつくってきた。そういうことを今、これからやらないと、日本人一人ひとりが安心して生活でき

ないし、町自体の質も下がり、ましてや美しさもなくなってきます。いい所には良質なお金の循環があり、いい企業も来る。安心、安全な場所をつくることは、結局は地域経済や地域の魅力を増すことになる。だからかつての知恵からも学びながら「地域の力を再生していこうよ」というのが「みち普請活動」の一番の根底にあります。私の専門は建築ですが、建築でも、社会基盤をつくる土木の世界でも、造ることではなく実際に利用してもらうことが目的なので、目指すところは同じだと思ってお手伝いをしています。

●「道」を利用して地域のコミュニティを再生していく、ということなのですね。全道各地に活動が広がっているようですが。

当初、国レベルでいろいろな動きがありまして、まずは北海道から手を挙げましょう、ということで、「みち普請を育てる会」は北海道が元祖なんです。この5年間、ワークショップや寄り合いと称して、様々な情報交換の場をつくってきました。地域をみんなで守っていったり、地域の良さを自分たちが確認して次の世代につなげていこうと皆さんが思っている。それをつなぐことができれば地域全体として強い力になります。

そのように連携していけるようなきっかけを、どの会場でもつくれたのではないのでしょうか。1人や、一つのグループでやっている自信がなかったり、グループ間の交流がない。それをワークショップで集まってお互いを知ることで、階段を一つ上ったようになるので、そこが面白いところです。

例えば最初の頃から参加されていらっしゃる岩内は、花の活動だけでなく道の安全はもちろん、広場を使ってお祭りをやったりと活動が広がっています。人と車は別々の道を使い、合理的に使えるようにと、車専用道路が考えられている。しかし、運転する人も歩く人も、そこで生活する人も、一方で「情」があるわけですね。「情」の部分に光を当てながら道を使って、「情」でつなげていく。「情」には、一つには花もあるけれども、お祭りもあるし、清掃活動もある、というふうに。

うれしいことに若い人の活動も各地で見られるようになってきました。多分最初子どもたちは、いやいや参加したんだと思うんですよ。しかし、自分たちが汗をかきながらやることで、喜ばれたりすることで、地域の役に立ち、自分自身も地域に住む人間だと実感できる。そのことを、頭で理解するのではなく、体で理解したことが素晴らしいです。いつの時からか、大人の世界と子どもの世界を分けてしまって、「子どもは勉強しなさい、お父さん、お母さんたちがこういうことするから、あなたはしなくていいよ」と。そうすると、大人の世界にどうやってデビューしていいのか分からない。大人たちがやっている「みち普請」に参加することは、社会的に一人前に扱われるわけですから、子どもはどんどん成長するし、責任感や奉仕の心も生まれる。子どもの社会的地位をちゃんと認証してあげることが大事です。

支え合う関係を育て直す

●地域を再生することには住民同士の関係にどんな変化があるのでしょうか。

「北海道は、道を使って地域そのものをもう一度再生させていく先進的なことをやっている」と、全国的にも非常に評価が高いんです。ですから我々の方から全国に、あるいは、国際的にも情報

を出していくことが非常に重要だと思います。そうすることで、花への取り組みや、清掃活動など、これだったらできると感じられることが何かしらありますよね。地域の価値をお互いが伝えあってつながっていくことができる。つながるのは、活動場所でもあるのですが、世代を超えてつながっていくことも大事だと思います。例えば、地方の町村では今後ますます高齢化が進むと思います。そうなった時に地域全体で高齢者の方をケアしたり、心を配っていくようなことが当たり前になっていかないと、お年寄り結局、違う町に行かざるを得なかったり、施設に入らなければいけなくなる。地域全体で高齢者を見守ることができたら、自分の家で生活できるわけですね。阪神淡路の大震災の時、被害の大きかった淡路島の北淡町の住民の方は、「あの家のおばあちゃんはこの部屋に寝ていて、どっちにいる」と知っていたわけです。普段から地域内での協力が形成されていたから、家屋の下敷きになった人々の救出が速やかになされた。このように支え合う関係が機能していると、まち全体が安全、安心になります。つまり、地域再生というのは目に見えない、助け合うという人間関係をもう一度丹念に育てていくことでもあるのです。

最近さまざまな事件が続いていますが、ゴミのないきれいな地域を、犯罪者はどう見るかという、「ゴミがないということは、住民が気配り、目配りをしている」と。すると、犯罪心理学的に「あまりフラフラできない」というふうに思うんです。だから、美しいということは、見た目が美しいだけではなく、結果として町が安全になっていくことにつながる。そんな地域にしていこうことが大事です。

●安全で美しい北海道をつくっていくには、推進していく人の力が重要になってきますよね。

日本も世界も上手くいってる所は女性がリーダーシップをとっているんですよ。みち普請も女性が圧倒的です。男が表舞台に出ているところはありませんが、実は裏で女性がちゃんと仕切っている。ことに女性は資金を大切に使います。親父に30万渡したら一晩でなくなりますけれども、女性は30万で有効的な活動をします。活動に若い人を

巻き込むことも大事ですね。そして若い人にはどんどん表舞台に出ていただく。

育てる会としては、今後も多くの情報を地域へ出していき、行政システムとつなぎ合わせていくことをサポートすることも役割だと思っています。みち普請活動は、どこまで育ったかという農作物みたいなものではないと思うんです。例えば、70才の親御さんが40才の子どもをすごく気にするわけでしょう。「北のみち普請を育てる会」はそういうスタンスで皆さんの活動を今後も支援していきたいと思います。

環境に負荷をかけない世界で一番美しい島へ

●将来の北海道の可能性、また目指すべき姿とはどういふものでしょう。

幸か不幸かわかりませんが、今後人口は減るでしょう。人が減ったなら、「まちをたたんでいく」ことが起きてきます。つまり、環境と上手にマッチするような地域社会にしていくのです。安全できれいなまちづくりへの地域住民の取り組みが実を結んで、自国のGNPを成長させたアイルランドを例に挙げますと、経済的な措置もあるのですが、環境が安全で美しい、物価も少し安い、だからヨーロッパのIT連中がアイルランドに拠点を構えるようになりました。安全な環境でしかも美しく、心地よい所へみんな集まるんですね。今でしたら、東京に集まらなければお金を動かせないと思う人たちが社会を動かしているけれども、そうではない人たちが社会の価値をつくっていくのも今、見えています。

北海道は歴史が100年しかない、たしかにそうなのですが、100年しかなければ、自分たちのやったことの歴史の意味って大きいわけですね。その役割が300年、500年の所よりも100年の所の方が見えやすいわけで、決して歴史の長い京都でやってらっしゃる方が中身が濃くて、100年の方が薄いというわけではないし、人口が多い島じゃないから、自分のやること、やったことの軌跡が見えるものなのです。見えにくい所より、見える方を選ぶ人たちも出てくるわけです。

「いい仕事がありますよ」という誘い方もあるけれども、ヨーロッパやアメリカの人たちや本州

の人たちに、「北海道ならすぐ満足していい生き方できるよ、かっこよく死ぬるよ」という誘い方もある。良い環境が人を呼び、集まった人が新しいビジネスを生むという良い循環が生まれる。皆さんの活動を連携させながら続けていって東ねると、北海道は世界中から人々が訪れる、世界の中で一番美しい島の一つになると思うんです。

「みち普請」は寄り合いでもあります。食べたり飲んだり、騒いだり。それが大事なんです。そういうことができるのが、花を植えたり掃除をした後の一杯だったり御飯だったりするわけです。人と人のコミュニケーションでもあるし、人と社会とのコミュニケーションでもあるし、人と自然とのコミュニケーションでもある。これからは社会的なことを考える部分と自分自身のことを考える部分、両方を使い分けながら地域住民として生きる姿勢が大事。なるべく多くの人たちと手を携えて仲間を増やし、誰かの町でなく自分の町にしていこうことをやっていただきたい。自分の町を自信持って、一番いい町だ、と感じられるように、活動ください。その通りだと思いますから。

■ プロフィール ■

小林 英 嗣 こばやし ひでつぐ

1946年生まれ。北海道大学工学部建築工学科大学院卒業。現在、北海道大学大学院教授・工学博士。都市計画、都市景観、都市デザイン、都市再生などの研究に取り組む。北海道都市計画審議会会長、北海道国土利用審議会委員なども務める。「北のみち普請を育てる会会長」として、みち普請活動を支援。行政と市民、NPOの連携による地域づくりを提唱し、地域や都市再生のコンサルタント・アドバイザーとして全国、諸外国を訪れている。

— 北のみち普請活動団体紹介 —

芸術の森フラワーロードに 花を咲かせる会

— 札幌市

芸術の森フラワーロードに
花を咲かせる会 代表

大谷 洋子さん

同会は昨年「札幌市都市景観賞」を受賞。「花の景観」に加え、世話をしている姿が景観になっている、というのも受賞の理由なので、それがとてもうれしいですね」



花の力で支えあいの生まれる芸術の森地区

「花壇をよみがえらせたい」そのひたむきな想いが、今日、沿道に美しい花を咲かせています。そしてそれを育み守っていくことで、目に見えない新しい花が地域に咲き始めているようです。

●芸術の森へ向かう沿線の花壇は とても美しいですね。

シンボルフラワーのヒマワリのほか、サルビアやペチュニアなど現在10種類の花を植えています。国道453号沿いの約3 km区間の国道花壇が活動場所で、近くの芸術の森では毎夏PMF国際教育音楽祭が行われ、国内外の人たちが集まる玄関口ですから、花で歓迎できればと思っています。秋に10名のデザイン担当者が集まって、翌年の花

壇の花の組み合わせを考えるんですよ。病院も多く、小中学校や、札幌市立大学、養護学園の通学路でもあり「花から元気をもらっている」「通るのが楽しみ」との声も寄せられています。春に植えた後は、約50人の会員が担当の花壇を持って自主的に世話をして、それ以外の花壇の世話はみんなで月2回、早朝に行きます。花の世話をしていると、「きれいですね」「こんにちは」と地域の人が声をかけてくれるなど、花を介してちょっとした触れ合いが生まれています。

●活動のきっかけは。

この場所は、諸事情で2年間雑草のまま放置され、その後、道路の改良工事で花壇の埋め立て計画が浮上したことから、なんとかして花をよみがえらせたいとの思いで、地域住民に呼びかけて会を設立しました。札幌市と開発局には要望を伝え



道ゆく人を楽しませる芸術の森フラワーロード



デザイン担当による会議。絵を描くように彩りを考える



5月中旬 花植え前日に1万3千株の花苗の「腰水づけ」

るために日参しました。住民が困っていることがあれば、まず、伝えてみる。そこから何かいい方法を相互で考えていく。誰かがやってくれることを期待しても変わっていかないですからね。開発局からは1年目からボランティアサポートプログラムで支援いただいています。現在、会員は164名。活動コンセプトは「自分たちの足元は自分たちできれいに。出来るときに出来ることを」です。通りを歩く時にゴミや草を取ってくれるだけでもいいし、カンパできる人はカンパを。毎年10万前後の寄付金のほか、公園の草刈りをして運営資金に当てています。また、会員の交流を深めるために、新年会や園芸講習会、通信の発行、美しい花の町訪問という企画で、一昨年はニセコ、昨年は由仁町を訪問しました。

●ご苦労や工夫されていることは。

花壇延長が長いので、水やりで苦労して試行錯誤した結果、4年目からは腰水づけという方法で随分楽になりました。花植え前日に、ブルーシートで作った水を張ったプールの中に花苗を3～4時間浸けることで、苗の自立を促します。植えた後は雨と苗の自立にまかせ、水やりは基本的にし

ていません。街路花壇の取り組みをされているところは同じような苦労があると思いますので、これは発信したいアイデアです。

●花の活動を通して、地域と今後どう関わっていきたいですか。

長く続けることが大変だけど大事なこと。花壇の花の力も借りて、気軽に挨拶し、支えあいの生まれる芸術の森地区になるように、10年、15年と花を咲かせ続けてバトンタッチしていきたいですね。



「5周年記念誌」と年3回発行の「花さき通信」

— 北のみち普請活動団体紹介 —

函館花いっぱい道づくりの会

— 函館市

函館花いっぱい
道づくりの会 代表

折谷 久美子さん

「新道沿い通ったらきれいでびっくりした」と、この活動を知らない人から言われると、「私たちがやってるのよ」と、つい自慢したくなります。



子どもからお年寄りまで、 地域力で花いっぱい

観光都市函館にふさわしく、訪れる多くの人に喜んでもらえるような美しい道を地域住民が協力して実現。子どもたちも参加できる機会をつくるのが、地域力の底上げになっているようです。

●函館新道での花の活動が、地域に 根づいてきているようですね。

6月10日が今年最初の活動日で、国道5号函館新道インターチェンジ付近の両側の植樹帯500mに1万2千株の花苗を植えました。あいにくの雨にもかかわらず子どもからお年寄りまで600人の参加がありました。当会は3年前に函館開発建設部の「花懇談」に参加する機会を得て、花の活動

団体や町内会の方と知り合った縁で設立し、ボランティアサポートプログラムの一環としてスタートしました。なぜこの場所を選んだのかと言うと、ここは観光バスや観光客も利用する函館の玄関口であることから、花を植えておもてなしの心でお迎えしようと思い、「はこだて花かいどう」と名付けて活動しています。初年度の平成16年の花植えは11団体430人でスタートし、翌年は17団体450人と増え、今年は19団体600人と更に増えました。約9割が地元石川・桔梗地区の方で、花を介していろんな交流ができる場になっているので、皆さん楽しんで活動されています。

●地域の子どもたちの参加が多いですね。

小中学校の生徒さんの通学路でもあるので、学校にも協力の声をかけまして、年齢別では10代の参加が約3割です。地域のスポーツ少年団の子供



函館の玄関口、函館新道沿線「はこだて花かいどう」が、明るく華やかに生まれ変わった



今年6月10日、花苗を植える地域の中学生たち。小中高生の参加が多いのが特徴

たちも参加していますが、最初は「どうして練習前に草むしりしなきゃいけないの。いやだなあ」と思っていたのが、水かけや草取りの世話をした花壇が、地域の人や観光客に喜ばれていることを実感でき、手ごたえを感じたようです。このように子供たちの活動が自慢なものですから、今回、北のみち普請で賞をいただけることになり、札幌での表彰式にぜひ生徒さんも参加させたいと思いました。当日は、亀田中学校の林君と参加。活動発表にも挑戦してもらいました。その後、いっしょに活動した林君の成長ぶりを担任の先生からお聞きし、とてもうれしかったです。

●資金面ではどんな取り組みをしていますか。

植樹柵の幅が1m60cmと広いので、花苗の確保に苦労しています。函館市住宅都市施設公社からの寄付や企業から寄付金を募って購入したり、2年目からは沿線にオープンしたホームック石川店が、会の趣旨に賛同して下さり、花苗の寄付をいただいていることも励みになっています。商店や企業などへの支援協力をお願い、また募金箱を作って、病院や企業、お店、役所などに置かせてもらい、春に回収することも地道ながらやっています。息の長い活動を行うためにも、道路管理者・自治体・企業・NPO・ボランティアの相互協力関係を大切にしていきたいですね。



雑草取りも自分たちでやると愛着がわくね



「北のみち普請 5周年記念フォーラム」に参加後の会場で。左から折谷さん、林君親子、小林会長

●どんな函館にしていきたいですか。

函館は観光名所も多く特に夜景が有名で、何度見てもきれいなんですよ。でも緑は多いけど花は少ないと言われます。訪れた方がまた来たいと思えるように、お昼の函館も魅力的にしたい。これからは「はこだて花かいどう」の輪を広げ、温かい人間関係を築きながらまち全体を花でいっぱいにしていきたいですね。



↑花苗確保のため市内各所に設置する募金箱

— 北のみち普請活動団体紹介 —

花と芝生の町づくり推進協議会

— 鹿追町

鹿追町役場 花係長

石澤 秋男さん

「他の町の人から鹿追ってきれいだよね。と言われるとうれしいです」と石澤さん。「花に関する仕事に専任で携われるのは幸せ」



花で人が訪れ、交流の輪が広がる

「花のまち」として知られる鹿追町。行政と町民が連携して美しいまちづくりに取り組んできたことで、住民に、地域に、どんな変化があったのでしょうか。花専任の町職員、石澤さんにお聞きしました。

●花によるまちづくりのきっかけは。

平成12年に「環境美化宣言」を行ったのに伴い「花と芝生の町づくり推進協議会」を設立して花と緑のまちづくりを進めてきました。平成13年に開催した「第3回国際花サミット」が起爆剤となって、これを機に町中が花で飾られるようになり、「花市」や町民の庭を公開する「花フェスタ」も評判で、この5年間の取り組みで「花のまち鹿追」のイメージが定着してきたと思います。

●花と緑を増やすためにどんな工夫をされていますか。

花の活動に協力してくれるフラワーマスター※が町内には約60名いて、ガーデニングの講習会を行ったり、プランターの花植え指導をしたりと大活躍です。花フェスタで人気の親子クマのトピアリーや 国道を飾るワイン樽の鉢への花植えはもちろん、花市での苗の出店、オープンガーデンもフラワーマスターのお宅が多いですね。国道274号沿いは国のボランティアサポートプログラムによって主に宿根草のヘメロカリスを植えていて、道で植栽柵を設置した商店街の通りは住民がボランティアで植栽と維持管理を行っています。町民ホール、図書館、消防署などの公共施設の周りは、苗は町の提供で、花植えと管理は各所管の職員が行います。また、町に花専門の担当職員がいるのも特色。ボランティアの高齢化の問題もありますが、町民、各種団体、事業所、行政が各自の役割



町民ホール前のクマ親子のトピアリー（立体花壇）は観光で訪れる人にも人気



国道274号沿いフラワーロードをヘメロカリスの黄色い花が彩る

分担をきちんと自覚し、お互いに協力して、より住みやすい環境にしていきたいです。

●昨年は国際的な花のイベントに参加されましたね。

カナダで開催された「国際花のまちづくりコンクール」では、最優秀は逃したものの、優秀賞をいただきました。事前に、カナダから審査員が鹿追に来て八つの審査項目を調べるためにいろんな場所を見学します。特に評価が高かったのが動物型の立体花壇です。また、然別湖を案内した時「こんなに素晴らしい湖はない」と感動されていて、町の宝を逆に教えられました。「北のみち普請」でも今回、鹿追の活動を表彰していただきました。評価されることで励みになり、住民の意識も違ってきます。

●まちづくりを通して変化したことはどんなことですか。

国際花サミットを開催した時に、「なぜそんなにお金をかけるんだ」と言う声もありましたが、鹿追は花市が開かれ、オープンガーデンも見られてすごいと評判になり、花で、町に人が来るようになり、花に夢中になっている町民が増えました。花市の売り上げや、お昼どきには食堂もにぎわう



カナダで開催された「国際花の町づくりコンクール」で、鹿追町の取り組みを紹介

など経済効果もあります。また、花の世話をしている時にゴミを拾いますから、通りがきれいです。人と人、町と町の交流の輪も広がってきました。夏には花に関わる地域連携のフォーラムを鹿追で開催しますが、今後とも住民と行政が協力して鹿追らしい花のあふれる町にしていきたいです。

■鹿追町役場 花担当連絡先

TEL. 01566-6-2311

※フラワーマスターとは、花づくりの知識や技術を知事から認定（市町村の推薦と講習会を受講）された人で、各地域で花のまちづくりリーダーとして活躍している。



個人宅もガーデニングが盛んで、多くの方がお庭めぐりに訪れる